兵庫県立大学環境人間学部　研究報告第15号（2013年）

ウィーン伝説考
― 旧市街の言い伝えについて ―

小谷　一夫

Betrachtungen über Wiener Sagen
― Überlieferungen in der *Inneren Stadt* ―

Kazuo KOTANI

Zusammenfassung

In der *Inneren Stadt* (Altstadt) von Wien gibt es recht viele Sagen. Infolge der langen Geschichte der Stadt stehen sie oft im unmittelbaren Zusammenhang mit den historischen Persönlichkeiten (z.B. mit den habsburgischen Kaisern) und Begebenheiten (z.B. mit der Pest, mit der Türkenbelagerung). Bemerkenswert ist auch, dass nicht wenige Sagen von bedrohlichen Mächten in der Unterwelt (z.B. „Der Basilisk in der Schönlaterngasse“, „Zum Heidenschuß“) und Teufelserscheinungen in und um St. Stephanskirche (z.B. „Die gebannten Dämonen“, „Buxbaums Sturz vom Stephansturm“) erzählen. Weil Wien wegen seiner geographischen Lage von verschiedenen Völkern immer wieder überfallen wurde, baute man eine massive Befestigungsanlage. Außerdem war die Stadt als Sitz des Kaisers des Heiligen Römischen Reichs eine der wichtigsten Städte im Christentum. Wien wurde also durch zwei *Schutzmauern* verteidigt：eine reale Schutzmauer, die Stadtmauer und eine seelische Schutzmauer, den christlichen Glauben. Aber die Wiener hatten trotz des doppelten Schutzes anscheinend eine vage Furcht vor dem, was über die Schutzmauern hinweg eindringen könnte. Diese latente Angst der Stadtbewohner zeigt sich nämlich in den Sagen von der Unterwelt und dem Teufel in der *Inneren Stadt*. Und da findet man auch einen Unterschied zwischen den beiden Sagen in der *Inneren Stadt* und vor der Stadtmauer von Wien.

Ⅰ.

西暦 1 世紀にローマ軍の駐屯地ヴィンドボナ（Vindobona）としてその礎が築かれたウィーンは、その後中央ヨーロッパにおける政治と文化の中心地として発展を遂げ、ヨーロッパの歴史にその名を刻んできた街である。ほぼ二千年にも及ぶ長いその歴史を反映して、この街にはまことに数多くの言い伝え、伝説が残されている。筆者は、先に「森と水の記憶－ウィーン周辺部の伝説について－」と題する論考において、かつてVorstadt（市外地区）やVorort（郊外地区）と呼ばれていたウィーン周辺部（現ウィーン市の第 2 区から第 23 区）に伝わる言い伝えについて考察した [1]。そこで詳らかにされたウィーン周辺部の伝説がもつ特徴とは、森と水が人々にもたらす脅威と恩恵がさまざまな形で形象化されている、ということであった。本稿は、19 世紀後半に敢行された都市大改造まで市壁に囲まれていた旧市街、すなわち、現在のウィーン第 1 区インネレ・シュタット（Innere Stadt）を舞台に語り継がれている伝説について、周辺部の伝説とも比較しつつ、その特徴を探ろうとするものである。

Ⅱ.

ウィーン周辺部においても、歴史上の人物や出来事と密接に関係した伝説は少なくなかったが、ハプスブルク

家が宮廷を構えたウィーン旧市街には、当然のことながら、同家にまつわる伝説が数多く残されている。それらの中から、ここでは、二人の皇帝に関する伝説を挙げておこう。

まずは皇帝ルードルフ２世（Rudolf II, 1552－1612）である。彼はおもにプラハに住んで占星術や錬金術に熱中した奇矯な皇帝として有名だが、そうした彼の性行を語る伝説がウィーンの王宮にも残っている。

皇帝ルードルフ 2 世のマンドラゴラ（ Die Alraune Kaiser Rudolphs II.）

言い伝えによれば、帝室図書館の管理主任は、はっきり言ってそこでは少しも気が休まるときがなかったという。無理やり室外に追いやられることもしばしばあった。とりわけ、写本や、そのほか珍稀な品々が保管されていた部屋がそうだった。そのなかに二つのマンドラゴラもあった。緋色の生地でできた服を着せられ、まるでちょうどよい大きさの本物の棺の中に横たわっているようだった。あたかも雄と雌の２体ででもあるかのように、両者には外見上はっきりとした違いがあった。そして、これらのマンドラゴラはルードルフ２世が将来起こることを探るときに使っていた、と言われている。ほかにも、マンドラゴラは小さな子どものように入浴させねばならず、それも混ぜ物の一切ないワインの風呂でなければならなかった、と言い伝えられている。さもないと、生まれたての赤ん坊のような泣き声を上げ、ちゃんと世話をしてもらうまで、泣き止むことはなかったという。[2]

啓蒙専制君主として多方面にわたる改革を断行したことで知られる皇帝ヨーゼフ 2 世（Joseph II, 1741－1790）については数多くの逸話があるが、ウィーンの市場を舞台とする以下の伝説は、皇帝の性状をよく表わしているものの一つである。

皇帝ヨーゼフの正義心（ Kaiser Josephs Gerechtigkeit）

皇帝ヨーゼフは、卵が甚だ高い値段で売られていることを耳にした。彼は平服姿で自ら市場へ出かけ、卵の値段を尋ねた。売っていた農婦が値段を告げた。「なんとまあ、高いことよ」と言いながらも、彼はその卵を２個買った。それからしばらくして戻ってきた彼は農婦にこう言った。「私に売ったあの卵、まだほかにあるかな？ あるだけ全部もらいたい。」「突然、いったいどうしたっていうんだい。高すぎるんじゃなかったのかい。」「そうだが」と彼は言った。「しかし、この卵には他にはない特別な点があるのでな。卵を割ったら、どれも中から金貨が出てきたんだ。」「それなら、私が自分でやるわ！」と農婦は叫んで、次々と卵を割り始めた。その間に皇帝は姿を消したのだった。[3]

為政者以外の伝説としては、ウィーン周辺部にもその足跡を残していたパラツェルズス（Paracelsus, 1493－1541）が、ローテントゥルム門（Rotenturmtor）そばの宿屋に暫し逗留し、飲食代として差し出した真鍮製の１プェニヒ硬貨を金貨に換えてみせたという言い伝えが残っている。[4]

キュセンプェニヒの家（ Das Haus zum Küssenpfennig）

キュセンプェニヒの家には、かつては黒鷲亭という名前の料理屋があった。金満家であった店の主には一人息子がいた。息子は店で働いていた遠縁の娘のことが好きだった。しかし、貧しい少女との結婚を父親が承諾してくれる見込みは全くなかった。さて、この料理屋には有名な医師で錬金術師のパラツェルズスが度々やって来ては、医者や市民たちとここで議論を交わしていたと言われている。一方で彼はいっこうに飲食代を清算する気配はなく、亭主は痺れを切らしていた。ある日のこと、この家で大騒動が持ち上がった。恋人たちがいちゃつき、抱き合っているところを父親に見つかったのである。かわいそうな娘はすぐに荷物をまとめて出て行くよう申し渡された。パラツェルズスは仲裁に入ったが、そうやって専ら父親の権限に属する事柄に口を挟む暇があったら、むしろ未払いの飲食代を支払ってもらいたい、と逆に怒鳴り返された。さらに、滞納している代金を今すぐ清算してくれないのなら、あんたにこの家から出て行ってもらう、と亭主はパラツェルズスを脅すのであった。

これまで数々の奇跡をおこしてきた男はポケットから真鍮製の 1 プェニヒ硬貨を取り出すと、「内金」と言いながら、それを亭主に渡した。同時に、愛し合う二人のため再度和解を求めた。しかし、それに対して父親はまるで暴君のごとく逆上した。彼は罵りながら床に真鍮製のプェニヒ硬貨をたたきつけ、もしこの硬貨が金貨にでも変わるようなことがあったら、そのときには息子があの貧乏な娘を嫁さんにするのも認めよう、悪魔にだって誓ってやる、そう言うのだった。

それを聞いたパラツェルズスは亭主にむかって、プェニヒ硬貨を拾ってみろ、と言った。すると ― びっ

くり仰天！ ― 亭主の掌にのっかっていたのは重たい一枚の金貨であった。こうなっては父親も約束を守るほかなく、愛する二人が一緒になるのを認めた。この「奇跡」についてのニュースは瞬く間に街中に広まった。件の魔法が行われた料理屋をひと目見ようと、人々が次々と押し寄せた。それ以来店は大いに繁盛し、店主は財産を倍にした。我を忘れるほどの嬉しさに、彼は何度も何度もプェニヒ金貨に接吻した。そして、誓いを守らなければ彼に下されることになる永劫の罰を恐れ、早々に愛し合う若い二人を結婚させた。この時からこの家は「キュス・デン・プェニヒ[=プェニヒに接吻]の家」と呼ばれるようになったという。[5]

歴史上の出来事と関連した伝説について言えば、ペスト禍とトルコ軍によるウィーン包囲にまつわる言い伝えが、旧市街でもやはり代表的なものである。ペストに関係した言い伝えとしては、次のものがある。

聖シュテファン教会の死者ミサ（Die Totenmette bei St. Stephan in Wien）

クリスマスの夜、聖シュテファン教会の主任司祭が翌日のミサで話す説教の準備をしていると、夜のしじまを破って俄かに妙な声の賛美歌が聞こえてきた。どうやら大聖堂から響いているようだった。そちらの方を眺めてみると、聖堂の窓が明るく照らされているのが見えた。驚いた司祭は尋常ならざる出来事にさっそく様子を見に行こうと、外套を取り、そして、大聖堂の中へと入っていった。そこで彼はすでに大勢の人たちが集まっているのを目の当たりにした。慄然としたのは、全員が丈の長い経帷子を着ていたことだった。そこには年寄りも若者も、男も女も、男の子も女の子もいた。その中には彼がよく知っている者もたくさんいた。しかし、なかにはもう何年も前に亡くなった人たちも交じっていることに主任司祭は気がついた。それから主祭壇の方に目をやった司祭は愕然とした。ミサを執り行っている僧侶が誰あろう自分自身であることに気づいたからである。彼は背筋が寒くなった。ますます戦慄を覚えながらも、自分を取り囲んでいる面妖な参会者たちを観察していた。その時、塔から1時を告げる鐘の音が響き渡った。すると、たった今まで目の前に見えていたものが、まるで風に吹き飛ばされたかのように、なにもかも消えて無くなってしまった。大聖堂の中にいるのは今や主任司祭一人きりだった。真に動揺した様子で自室へと戻った彼は、教区日誌にこの不思議な出来事を書き記した。その際、幽霊たちのなかに姿を見かけたものの、まだ亡くなってはいなかった彼の知り合いたちの名前を、自分自身を含め、書き留めておくことも忘れなかった。一年後（1364年）、司祭が日誌に名前を記した者たちは、彼を含め、みなペストで他界した。[6]

ウィーン包囲に関する伝説は次章でも取り上げることになるが、ここではまず、ウィーンにおけるカフェーハウス誕生物語として人口に膾炙しているコルシツキーの伝説に触れておこう。伝説によれば、トルコ軍による1683年の第2次ウィーン包囲の際に、ゲオルク・フランツ・コルシツキー（Georg Franz Kolschitzky）という男が、トルコ兵に変装して、街を取り囲んでいた敵陣を通り抜け、キリスト教諸国からの援軍と連絡を取ることに成功した。彼の活躍もあって、まさに陥落寸前であったウィーンはキリスト教同盟軍によって解放された。勲功に対する褒賞は何がよいかと尋ねられた彼は、敗走したトルコ軍の陣営に大量に残されていた緑色の豆を所望した。ウィーン市民にとってそれはラクダの餌かなにかと思われたのだが、トルコの言葉と文化に精通していたコルシツキーは、それがかの地で愛飲されているコーヒーの生豆であることを知っていた。こうしてコーヒー豆を手に入れた彼は、聖シュテファン教会そばのシュロッサー小路（Schlossergassl）にウィーン最初のカフェーハウス「青い瓶」を開業したのである。

ゲオルク・フランツ・コルシツキーは実在した人物で― ただし実際の名前はコルツィツキー（Koltschitzky）―、第2次ウィーン包囲時に伝令役を果たしたことも本当である。もっとも、連絡の任に当たっていたのは彼一人ではなく、ほかに約20名の伝令がいたと言われている。さらに、史実に即して言えば、彼が褒賞としてコーヒー豆を入手したという事実も、それをもとにウィーン最初のカフェを開いたという事実もない。ちなみに、歴史研究者カール・テプリーによれば、ヨハネス・ディオダート（Johannes Diodato）というアルメニア人商人が、1685年、皇帝レーオポルト1世からコーヒーの専売特権を得てハールマルクト（Haarmarkt）［現在のローテントゥルム通り（Rotenturmstraße）］に開いた店がウィーン最初のカフェーハウスであるという。[7]

Ⅲ.

旧市街には、「聖シュテファン教会の死者ミサ」伝説のほかにも、死者や死者の霊魂との遭遇を語る言い伝えが残っている。ここでは、「髑髏の家」と「ショッテン修道院の白い女」の二つを紹介しよう。前者の中に出てくる

ペーター教会（Peterskirche）は、4 世紀後半にはすでに建てられていたとも言われる、ウィーン屈指の古い教会の一つで、その昔は教会堂の周りに墓地が存在していた。後者の「白い女」はヨーロッパ各地の古い城や館などで数多く語り伝えられている幽霊伝説の一つだが、ウィーンの旧市街では、ほかに王宮（Hofburg）内にも「白い女」出没の言い伝えがある。[8]

髑髏（されこうべ）の家（Zum Totenkopf）

ボークナー小路（Bognergasse）の髑髏の家は貴公子コンラート・フォン・キルヒベルクの住まいだった。彼はウィーンのドンファン、放蕩児として頗る評判が悪かった。あるとき、ペーター教会の墓地（Petersfriedhof）で身持ちのよくなかった娘の髑髏がころがっているのを見た彼はその髑髏に向かって、ご主人を今夜お客として我が家に招きたいので、その旨伝えてくれるよう頼んだ。すると、娘は本当にこの背徳者の家に現れた。偶然にもそこに居合わせた篤信の司祭のおかげで、不届き者は死霊に連れて行かれるのを免れた。この出来事から彼の家には件の名前が付けられたのだった。[9]

ショッテン修道院の白い女（ Die weiße Frau im Schottenkloster）

人間に今だ霊を見る目があった頃のこと、何百年もの間ショッテン修道院（Schottenkloster）の僧たちには、たとえ心の痛む出来事に接しても、それに対する然るべき心構えが常にできていた。ショッテン修道院では、真夜中に突然廊下や会堂が明るくなることがあった。哀れなベルタ・フォン・ローゼンベルク（1476 年 5 月 2 日没）の霊が出没するのだった。地面まで垂れ下がった真っ白なガウンを着て白い女が現れるのを目の当たりにした若い修練士が、驚いて息を呑み、身をすくませている間に、彼女は直ぐにまた墓の中へと掻き消えてしまう。そこで彼女の亡骸はもう 400 年以上もの間復活のときを待っているのだった。ショッテン修道院に霊が姿を現すと、けっしてよいことは起こらなかった。たいてい、それは修道士の誰かか、場合によっては、ほかならぬ大修道院長が亡くなる前兆であった。[10]

ウィーン周辺部においては超自然的存在が登場する伝説が少なからず見られたが、旧市街にもそうした言い伝えが残されている。最も有名なものは、シェーンラテルン小路（Schönlaterngasse）のバジリスク伝説であろう。

シェーンラテルン小路のバジリスク（ Der Basilisk in der Schönlaterngasse）

1212 年 6 月 26 日の早朝のこと、当時は「ウンターム・テンペルホーフ」（unterm Tempelhof）と呼ばれ、現在はシェーンラテルン小路と名付けられている横丁のパン屋の親方の家から、大きな叫び声と物音が聞こえてきた。悲鳴と助けを求める声が鳴り響いたのである。すぐに物見高い人々が大勢集まってきて、あの悲痛な叫び声はいったい何だったのか、聞き出そうとした。とうとう市裁判官までも馬に乗って現れ、だれか害を受けたり、あるいは、暴力を振るわれたりした者はいないか、尋ねてまわった。

そのとき、パン屋の親方が青ざめた顔をして家から出てきて、今日のこの騒ぎの原因を市裁判官に語った。女中の一人がつるべ井戸の水を汲みに中庭へ出て行ったところ、用事も果たさぬまま、すぐに戻ってきたかと思うと、声を張り上げ、こう報告したという。井戸の中からひどい悪臭が立ち上ってきていて、自分はもう少しで気を失うところでした。また、井戸の底ではそれはもう奇妙な光がぎらぎらと輝いていて、びっくりして心臓が止まりかけました、と。パン焼き職人の一人が恐怖におののく女中をあざ笑った。そして、元気なこの若者は、自分が摩訶不思議なこの出来事をもっと詳しく調べてみます、と申し出た。彼はロープを体に巻きつけ、ピッチを染ませた松明を灯しながら、井戸の中へ降りていった。しかし、数尋も降下したかしないうちに、彼もまた物凄い悲鳴を上げたので、再度大急ぎで引き上げたが、すでに半死状態であった。

介抱によってさしあたり息を吹き返した若者は震える声でこう語った。井戸の底に目をやったら、身の毛もよだつような生き物がいるのが見えた。体は大きな雄鶏に似ているけれど、見た目がおぞましい。ウロコに覆われたぎざぎざのしっぽ、イボだらけで不恰好な足、怪しく光る目、そして、頭には小さな冠を被っていた。怪物は、雄鶏とヒキガエルと蛇が一緒になったような感じだった。生まれてからこの方、あんな気味の悪いやつは、ほかに見たことがない。それで直ぐに目をつぶって、大声で助けを呼んだんだ。なぜって、怪物の燃えるような目を見ていたら、血管の中の血まで固まってしまうような気がしたからなんだ。鼻をつく悪臭に胸は苦しくなるし、呼吸も困難になっていたんで、もし直ぐに引き上げてもらっていなかったら、惨めな最期を迎えていたことは間違いない。

若者の話を聞いていた人たちは呆然と立ち尽くした

まま、途方に暮れていた。そのとき、教養があり、自然科学に精通していた一人の医者が前に進み出て、人々に説明し始めた。怪物はバジリスクと呼ばれていて、雄鶏が産み落とし、ヒキガエルが温めた不思議な卵から生まれる。有名な自然学者のプリニウスにそのような生き物についての記述がある。彼はこう言っている。その眼差しには毒が含まれていて、見つめられた者は誰も死を免れない。怪物を殺す方法はただ一つ、ぴかぴかの金属の鏡を眼前に掲げるしかない。すると、鏡の中に己の姿を見た怪物は、そのあまりの醜さに驚愕、憤怒激昂のあまり体が張り裂けてしまう。しかし、そのような怪物退治には常に大きな危険が伴うので、彼自身についていえば、試す気は持ち合わせていない。

さて、皆どうしたらいいのか分からなかった。冒険を引き受けようという者も現れなかった。ついに市裁判官が、大きな石と土を運んでくるよう命じた。それらが井戸の中へ投げ込まれ、怪物はその下敷きになって、絶命した。そして、パン焼き職人の若者もその日のうちに帰らぬ人となったのだった。

その後、この出来事をいつまでも記憶に留めておくため、恐ろしい怪物を忠実に模した像が家の壁龕に据えられ、銘文が刻まれた。[11]

バジリスク伝説は、井戸を掘削中に偶然見つかった奇怪な形の石灰質団塊、あるいは、井戸から噴出した有毒なガスがきっかけとなってできた話ではないかと推測されているが[12]、同時に、この伝承には地下世界に対するある種の恐れ、恐怖心といったものが表現されているように思われる。ウィーン旧市街の地下には異形のものたちが潜んでいる、という人々の想念を表わしている言い伝えは他にもある。例えば、ヴォルツァイレ（Wollzeile）の怪物とブルート小路（Blutgäßchen）の亡霊である。

臭気漂う竜の家（Zum schmeckenden Wurm）

古くからの言い伝えによれば、その昔、ヴォルツァイレのある家の地下室に竜のような怪物がいるのが見つかったという。以来、恐ろしいその姿を描いた絵が店の看板として長いことこの家に掲げられ、家は「臭気漂う竜の家」と呼ばれるようになった。というのも、件の怪物はむかむかするようなひどい刺激臭を発していたので、そのような名前がつけられたのだった。[13]

ブルート小路（Das Blutgäßchen）

ブルート小路はジンガー通り（Singerstraße）とドーム小路（Domgasse）とを結んでいる。昔から広く知られている言い伝えによれば、由来を示す名前自体が物語っているとおり［訳者註：「ブルート」（Blut）はドイツ語で「血」を意味する。］、そこは恐怖と戦慄の場所である。いわく、テンプル騎士団が解散させられたとき、ここで騎士団員が皆殺しにされ、溢れた血が川のようになってジンガー通りまで流れていったという。そして、騎士団員が逃げ出そうとしたフェーンリヒホーフ館（Fähnrichhof）の地下室には、それ以来、血まみれになったテンプル騎士団の亡霊が出るようになったという。また、テンプル騎士団の財宝もその地下室のどこかに隠されていると語り継がれている。[14]

オスマン・トルコ来襲にまつわる伝説として、旧市街には以下のような言い伝えもあるのだが、地下から迫りくる脅威を表わしているという意味で、上述した伝説群と同一グループに属するものと考えることができるだろう。

ハイデンシュスの家（Zum Heidenschuß）

ハイデンシュス（Heidenschuß）の辺り、その昔いわゆる内市門があった場所の角地には、今も一軒の大きな家が建っている。言い伝えによれば、1529年のトルコ軍による第1次ウィーン包囲の際に、ここで敵の掘った地下道が発見されたと言われている。当時この建物にはパン屋が住んでいた。夜中に一番下の地下室で仕事をしていたパン屋の徒弟が ― 名前はヨーゼフ・シュルツ、生まれはシュレージエンの小都市ボルケンハインとされている ― 太鼓の上に置いておいたさいころが跳びはねる様子から敵が地下道を掘っているのに気づき、帝都防衛軍司令官に通告した。司令官はすぐさま必要な対抗措置を講じるよう命じた。そして、地下道を使って侵入することを目論んだトルコ軍は撃退されたのだった。（一説によれば、地下道に水を流し込み、トルコ兵を溺死させ撃退したのだという。）

この早期発見によって市南西部が大災厄を免れたことは、フェルディナント1世からウィーン・パン屋組合が付与された特権からも明らかである。それは、復活祭第2祝日に、職人頭たちが旗をなびかせ、トルコ音楽を鳴り響かせながら、組合の杯を手に市中を行進することが許されていたという特権であった。これがパン屋の行進と言われていたものだった。最後にこの行進が行われたのは1810年のことである。[15]

ヨーロッパの都市は昔から防衛のため周囲に市壁をめ

ぐらせるのが常であったが、なかでもウィーンはアヴァール人、マジャール人、トルコ人といった異民族の来襲に繰り返しさらされてきたため、とくに堅牢な市壁を築いてきた。実際２度にわたってウィーン攻略をもくろんだオスマン・トルコの大軍が結局その野望を果たせなかった理由の一つは、強固な市壁を攻めきれなかったからである。こうして市壁は古都ウィーンを外敵から守る上で大きな役割を果たしてきたのは確かだが、同時に、市壁がけっして完全無欠のものではないこと、壁を越えて危険が迫ってくる場合があることをウィーンの人々は常に感じていた。そうした彼らの潜在的な不安感が向けられた先の一つが地下世界であった。地下世界に対する恐れが様々に形象化されて姿を見せている上述の伝説群、その背景にはウィーン旧市街の住民のこうした潜在意識が横たわっているように思われる。[16]

IV.

異界を代表する存在と言える悪魔は、ウィーン周辺部の森のなかにも繰り返し現れたが、旧市街にも彼らがしばしば出没した場所がある。意外にもそれはウィーンの中心、聖シュテファン教会とその周辺である。聖シュテファン教会にまつわる伝説のなかで最も有名なものの一つが、北塔の建設に当たって大工のハンス・プックスバウムが悪魔と契約を交わしたという言い伝えである。

シュテファン教会の塔から墜落したプックスバウム（Buxbaums Sturz vom Stephansturm）

己の師匠でもある親方を超えるべく、プックスバウムは、極めて短期間のうちに［聖シュテファン教会の］第２の塔を建ててみせると宣言した。しかし、どうすれば約束を果たすことができるのか、あらためて考えてみればみるほど、彼の自信は揺らぎだし、言い知れぬ不安がその心を捉えるのだった。少し前に完成したばかりの巨大な塔を何日もの間眺めながら、立派な教会堂前の、第２の塔の建設予定地に彼が真夜中頃まで佇んでいることもまれではなかった。今もまた、プックスバウムはそんなふうに佇んで、思い悩んでいた。そのため、自分の身の回りで起きていることに、長いこと彼は気が付かなかった。ふと顔を上げると、すぐ近くに歳を取った侏儒がいるのが目に入った。侏儒は同情の眼差しで彼を見つめていた。「気の毒に」、と怪しい男はしゃべり始めた。「お前さんを助けてやろう。塔の方は、お前さんが約束したよりも早く出来上がるよ。礼もなにも要らない。ただし、工事中は、お前の許嫁マリーアの名前だけは口にするなよ！」途方に暮れていたプックスバウムは、言われたとおりにすると約束し、こうして取り決めが結ばれた。翌日彼は建設工事を開始した。工事は、誰もが奇異の念を抱かざるをえないほど速いペースで進んだ。プックスバウムはというと、自分のライバルや自分のことを疑っていた市参事会の連中に対して彼が収めることになるであろう勝利を思い、もう得意満面で、湧き上がる喜びの念を抑えきれなかった。毎晩、彼は一番高い足場に上っては一日の仕事の進み具合を眺め渡したが、工事が順調に進んでいる様子に彼の心は更なる計画と希望とで満たされるのだった。こうして、工事が始まってからというもの、プックスバウムはまだ一度も恋人のことを考えたり、いわんや彼女に会ったりする時間が取れなかった。しかし、ある晩のこと、彼がまた高揚感に浸りながら、足場から人々の行き来する暗い小道に視線をやったとき、その時彼の目に飛び込んできたのは、下の道を歩いていく麗しい恋人の姿であった。歓喜の嵐に、件の約束も忘れ、彼は叫んだ。「マリーア！」と同時に、足場は崩れ、彼は高みから墜落した。そして、粉々になった塔の残骸が彼の遺体を覆ってしまった。赤い姿をしたものが現れ、またすぐに消えた。しかし、地獄から響く嘲笑の声が広く街中にこだました。

このとき以来、第２の塔を建設しようという考えを抱く者はもう誰もいなくなった。市参事会が瓦礫を撤去させたが、不幸な最期を遂げた男の痕跡は何一つ発見できなかった。[17]

悪魔にとって、聖シュテファン教会はよほど目障りな存在だったようで、教会そのものの建設を邪魔したという話も伝えられている。もっとも、こちらの方は悪魔の狙い通りにはいかなかった。

シュテファン広場の風と雨（Wind und Regen auf dem Stephansplatz）

聖シュテファン教会の建設が大工たち、なかでもクロースターノイブルクの優れた親方ヴェンツラの手によって着実に進展していることが悪魔には気に入らなかった。そこで悪魔は雨と風と盟約を結んで、自分が呼び戻すまで、彼らに高くそびえるこの建物の周りを回っているように命じた。そうすれば、大工たちも悪魔にとって不快な仕事を止め、厄介払いができるだろう、と考えたのだ。しかし、親方も職人も毎日敬虔な祈りをささげては仕事にとりかかったので、悪の力は彼らになんの手出しもできなかった。それで、悪魔は腹を立て、怒りに髪を逆立てながら、姿を消してしま

った。気の毒にも、そのとき悪魔は風と雨の両者を連れて行くのを忘れた。彼らはそれから何年もの間悪魔が戻ってくるのを待っていた。が、とうとう彼らは怒りを爆発させ、声高に訴えるかのように、教会の周りを荒れ狂った。親方が彼らのことを見つけて、なんとか助けてくれることを願って。しかし、親方が彼らに気づくことはなかった。それゆえ、風と雨はいつまでもその場に縛りつけられたままとなってしまった。これを知ったウィーン子たちはこんな戯れ唄を作った。

「他所はみな上天気の日もあるけれど、
シュテファン広場には風と雨が居座ってござる。」[18]

また、次に紹介するのは、教会の第2の塔が未完成のままとなっている理由を悪魔の仕業と結びつけている点で、プックスバウムの伝説と共通する言い伝えだが、それ以上に注目すべきは、悪魔たちが神に守られた神聖な空間であるはずの大聖堂の中にまで入り込んで、さまざまな悪さをする場合さえあった、と伝えている点である。

幽閉された悪魔（Die gebannten Dämonen）

その昔、3匹の悪魔がシュテファン教会の周り、さらには、中でも悪さを働いていた。彼らはルツィファル、シュピリファンケル、そして、シュプリンギンケルと呼ばれていた。彼らの中でもルツィファルがもっとも乱暴で、危険だった。第2の塔が未完成のままなのも彼のせいであると考えられていた。すなわち、塔が完成するのを邪魔するため、ある日ルツィファルは変装して塔の上に現れ、言葉巧みに大工の親方を建物の先端部へと誘い出し、そこから彼を突き落としたのだ。人々はこの性悪なルツィファルを追い、ついに捕捉することに成功した。シュピリファンケルとシュプリンギンケルの方は相変わらず大聖堂の中を跳びはねまわって、信者たちにさまざまな嫌がらせをしていたが、彼らもそれからまもなくして捕らえられた。その後3匹の悪霊は皆教会の外壁に取り付けられた、およそ脱出不可能な檻の中に幽閉され、しまいにはそこで石になってしまったのだった。[19]

また、聖シュテファン教会の塔と悪魔については、次のような言い伝えもある。昔、教会の塔の中には九柱戯のできる小部屋があった。あるとき、そこで塔守りが一人の男と九柱戯の試合をすることになった。男はいとも簡単に塔守りを負かしてしまうと、得意になって、次は悪魔と一戦交えたい、と大口を叩いた。すると、ほんとうに悪魔が現れて、男の望みどおり、悪魔との試合が行われたのだが、彼は勝負に負けたばかりか、命まで落としてしまった。[20]

聖シュテファン教会の周辺に残る悪魔伝説の中でも最も有名なものは、シュトック・イム・アイゼン（Stock im Eisen）にまつわるそれであろう。シュトック・イム・アイゼンは、ケルントナー通り（Kärntnerstraße）とグラーベン（Graben）が出合う角、かつてアルター・ロスマルクト（Alter Rossmarkt）と呼ばれていた広場 － 現在はシュトック・イム・アイゼン広場 － に面して立つ、高さ219センチメートルのトウヒの切り株で、聖シュテファン教会とともに、ウィーンのシンボルの一つとなっている。切り株には鉄製の輪が取り付けられ、また幹の表面には夥しい数の釘が打ちつけられている。ちなみに、シュトック・イム・アイゼンとはドイツ語で「鉄の中の切り株」の意である。この切り株のいわれに関しては悪魔と錠前師をめぐる言い伝えがあるのだが、いくつか存在するヴァリアントの中で代表的なものは以下のとおりである。[21]

シュトック・イム・アイゼン（Der Stock im Eisen）

その昔、キーンマルクト（Kienmarkt）の錠前師の親方が見習いの若者に、街の外へ行って粘土を取って来るよう言い付けた。途中で陽気な仲間数名と出くわした見習いは、仕事に取りかかるのが遅くなってしまった。そして、市内に戻ろうとした時には、辺りは真っ暗で、市門もすでに閉まっていた。親方から受けるであろうお仕置きのことを考え、見習いは恐ろしくなって泣き出してしまった。ふと気が付くと、赤いマントに身を包んだ背の低い侏儒が一人、彼の前に立っていた。頭に被った帽子の上では、一本の長い緑色の羽が揺れていた。「お前さんを助けてやろう」とそいつは言った。「しかし、日曜のミサを一度でもサボるようなことがあったら、お前の魂は私のものだ！」要するに、侏儒は悪魔にほかならなかったのである。途方に暮れていた見習いは取り引きに応じた。翌日、赤い服を着た貴公子が錠前師の親方のもとを訪れて、アルター・ロスマルクトに立っている木の幹に巻きつける鉄製の輪っかと、誰にも開けられない精巧な輪っか用の錠前を注文した。しかし、難しいこの仕事をあえて引き受けようとする者は一人もいなかった。すると、件の見習いが再び悪魔の助けを借りて、錠前を仕上げてしまった。そして、彼にはすぐに職人資格が与えられた。一方、悪魔はというと、鍵を持ったまま立ち去ってしまった。

職人は修業の旅に出た。一年後故郷に戻った彼は、ウィーン市参事会が例の木の幹（シュトック・イム・アイゼン）の鍵を完成させた者に親方資格を付与する考えであることを耳にした。職人は鍵の鍛造に取り掛かった。しかし、悪魔が灼熱の炎の中に座っていて、鍵の先端部分の向きを反対にしてしまうのだった。そこで賢い若者はもう一度試みることにした。今度は鍵の先端部をわざと逆さまにして炎の中へ突っ込むことで、まんまと悪魔を出し抜くことに成功した。すなわち、悪魔が再度向きを変えたので、鍵は正しい形状を獲得したのである。こうして、職人は集まった市参事会員たちの前で錠前を開けてみせることができ、すぐさま親方審査合格証を手にした。そして、有頂天になった彼は鍵を空高く放り投げた。一同が驚いたことに、鍵は二度と下に落ちては来なかった。

若い親方の富と名声は年を追うにつれ、次第次第に大きなものとなっていったが、彼はけっして日曜のミサに参列するのを忘れるようなことはなかった。しかし、やがて悪魔の誘惑に屈した彼は、贅沢三昧な暮らしと酒と賭け事に浸るようになった。ある日曜日のこと、親方は仲間とこの日もトゥフラウベン通り（Tuchlauben）の「シュタイネルネン・クレーブラット［=石造りのクローバーの葉］亭」にみこしを据えていた。親方が時刻を気にして尋ねるたびに、仲間たちは彼を引き留め、ミサまではまだ十分時間がある、と言うのだった。こうして彼らは陽気に酒を飲み、サイコロ賭博を続けていた。その時、12時を告げる鐘が鳴った。錠前師の親方は跳び上がって、急いで聖シュテファン教会へ向かった。しかし教会に着いた時、彼の耳に聞こえてきたのは、ミサの終わりに司祭が唱える「イテ・ミサ・エスト」の言葉だけだった。すると、すでに彼の前にはあの赤い服を着た貴公子が立っていた。背の低い侏儒は物凄い大男へと変身し、錠前師の体を引っ掴んだかと思うと、空中で八つ裂きにした。以来、遍歴修業中の錠前職人たちが、追悼の意味でシュトック・イム・アイゼンに釘を打ちつけるようになったのである。[22]

これらの伝説は、キリスト教信徒たちに対して、邪悪な誘惑に応じたり、不遜な振る舞いに及んだりといった背徳的行為を戒めるものである。と同時に、「シュテファン広場の風と雨」や「幽閉された悪魔」といった伝説にみられるように、カトリック教会の外に対して、反キリストに対抗する教会自らの力を誇示してもいる。聖シュテファン教会には、安置されている聖画や聖像にまつわる奇跡も数多く伝えられているが[23]、信者の信仰心を強め、教会の威光を高めるという点で、上述の伝説群は確かにこれらと軌を一にするものであるだろう。しかし、古都ウィーンのシンボルとして街の中心に位置する聖シュテファン教会とその周辺にこれほどまで悪魔、すなわち、異界の存在に関わる伝説が語り継がれてきた背景には ― 教会の意図とは別の次元において ― もうひとつの意味合いが潜んでいるのではないだろうか。すなわち、人々の集合的無意識といった次元にまで遡れば、これらの伝説のなかにも、第Ⅲ章で述べた堅牢な市壁を超えて市中深くまで侵入してくるものに対するウィーン人の漠たる不安感の投影をみてとるができるように思われるのである。

Ⅴ.

以上、ウィーン旧市街（第１区）の伝説についてみてきたが、そこには、まずはウィーン周辺部同様の特徴が見られた。それは、オーストリアという国が辿ってきた現実の歴史とじかに関わっている伝説が数多く残されているということである。すなわち、歴史的人物については、ハプスブルク帝国の長年の都として、ハプスブルク一族の伝説が、また、歴史的出来事については、この国を存亡の危機に立たせたペストの蔓延とトルコ軍の襲来に関する伝説が、旧市街においても代表的なものであった。

もう一つの特徴は、ウィーン旧市街に暮らす住民たちの心の奥底に潜んでいる不安感や恐怖心が投影された伝説が少なくないということである。その地理的条件から、古来異民族、異教徒の襲来に常に悩まされてきたウィーンは、堅牢な市壁とキリスト教（カトリック教会）という、物理的、そして、精神的な〈防護壁〉を以って、住民の安全と安心を図ってきた。こうしてウィーンはヨーロッパでも屈指の城塞都市となり、また、神聖ローマ帝国皇帝が鎮座するカトリック世界の牙城の一つともなったのだが、それでも住民たちの不安や恐れが完全に払拭されたわけではなかった。ウィーン旧市街に語り継がれる、地下世界への恐れを示した伝説群や悪魔伝説には、ウィーンという都市に築かれた物理的、精神的な〈防護壁〉を超えてやって来るものに対する人々の漠たる不安感が表わされているのである。

ウィーン旧市街とウィーン周辺部。両者は、ウィーンという都市ならびにオーストリアという国の歴史と密接に関連した伝説が多い点で共通している。その一方で、後者の伝説には、ウィーンを取り巻く豊かな自然、とりわけ森と川に対する人々の意識を映し出しているものが

多いのに対して、前者の伝説には、市壁で守られた都市空間に生きる人々ならではの住民心理を反映したものが少なくない、という違いを指摘することができるだろう。

註

1）小谷一夫「森と水の記憶－ウィーン周辺部の伝説について－」（『兵庫県立大学環境人間学部研究報告第13号』2011年、pp.135-144 ）

2）Leander Petzoldt (Hrsg.)：*Sagen aus Wien.* München (Eugen Diederichs Verlag) 1993, S.163.［以下、LP と略記］

3）LP, S.52.

4）歴史上の人物ではないが、ファウスト博士に関する伝説がウィーンにもある。それは、フライウング（Freyung）近くの地下酒場にある日姿を現したファウストが、無作法な給仕を魔法を使って懲らしめ、さらには、壁に描かれた悪魔を呼び出して人々を驚愕させた、というものである。Vgl. Gustav Gugitz (Hrsg.)：*Die Sagen und Legenden der Stadt Wien.* Wien (Verlag Brüder Hollinek) 1952, S.47ff.［以下、GG と略記］

5）GG, S.124f.
グーギッツはこの伝説について、パラツェルズスがプェニヒ硬貨を金貨に変えてみせたという元々あった言い伝えに、若い二人の恋愛話が付け加えられたのは比較的新しく、19世紀になってからのことであろう、と述べている。Vgl. GG, S.124.

6）GG, S.70.

7）Vgl. Elisabeth Koller-Glück：*Alt-Wiener Sagen und Legenden und ihre realen Hintergründe.* Erfurt (Sutton Verlag) 2009, S.25ff.［以下、EK と略記］

8）Vgl. GG, S.67.

9）GG, S.125f.

10）GG, S.67.

11）GG, S.24ff.

12）Vgl. Reingard Witzmann：*wunder.orte / zauber.zeichen. Sagenwege durch Wien.* St.Pölten u.a. (NP Buchverlag) 2005, S.123.

13）GG, S.23.

14）GG, S.128f.

15）GG, S.114.

16）トルコ軍が地下道を使った攻撃を企てていたという伝説については、発見時、敵の地下通路はすでに市の中心部、聖シュテファン教会近くまで達していた、というヴァリアントもある。Vgl. LP, S.68f.

17）GG, S.56f.
ハンス・プックスバウムについては „Hans Puchsbaum“ と表記される場合も多いが、ここではグーギッツに従って „Buxbaum“ とする。なお、ウィーン方言において „b“ は一般に無声音化するので、発音そのものは変わらない。

18）GG, S.43f.

19）GG, S.57f.

20）Vgl. GG, S.43.

21）シュトック・イム・アイゼンの正体については、いわゆるウィーンの森がかつてここまで広がっていたことを示す記念物、ウィーンの街の中心点を示していた標柱、あるいは、鍛冶屋が蹄鉄を打ちつける際に馬を繋いだ杭等々、諸説があるが、はっきりしたことは分かっていない。Vgl. EK, S.61.

22）EK, S.59ff.

23）例えば、その目からたびたび涙を流してきたという「ペッチュの聖母マリアの絵」（Gnadenbild Maria Pötsch）、毛髪を使って作られた髭が切っても切っても伸び続けていたと云われるキリスト十字架像、女主人から窃盗の疑いをかけられていたある奉公人を救ったと云われる「奉公人の聖母像」（Dienstbotenmuttergottes）等があるが、一つだけ詳述しておく。

金の井戸亭（Zum goldenen Brunnen）

ターボール通り（Taborstraße）の料理屋「金の井戸亭」はレーオポルトシュタット（Leopoldstadt）［現在のウィーン第2区］でも最も古い飲食店の一つだった。かつては繁盛したこの店も戦争の惨禍や疫病によってすっかり廃れてしまい、店主夫婦はどん底の生活を強いられていた。そこで女将さんはシュテファン教会へ出かけ、助けを求めて教会の聖母像に祈りをささげた。すると、聖母像はゆっくり祈っている女の方に身を傾けた。そして、こう話すのを女将さんははっきりと耳にした。「家へ帰って、中庭にある井戸から馬のために水を汲んであげなさい。しかし、馬が必要としている以上の水は汲んではいけません。そうすれば、どの桶の底からも金貨が一枚見つかるでしょう。」女将さんは随喜して、急いで家に帰り、そして、言われたとおりにした。毎日彼女が桶の中で見つける金貨によって、かつての豊かな

暮らしもまもなくしてこの家に戻ってきた。料理屋の方も、また大勢の客が来るようになり、人々から「金の井戸亭」と呼ばれるようになった。しかし、やがて亭主の心には驕りが芽生え、毎日桶から手に入れられるだけの金貨ではもう満足できなくなった。ある夜、こっそり起きた彼は、朝まで水汲みを続け、たくさんの桶を井戸水で満たした。しかし、もはや１枚の金貨も見つけることはできなかった。(GG, S.119f.)

（平成24年９月５日受付）